

スタッフルーム
Staff room

緊急事態 with コドモ

さとう さわこ
佐藤佐和子

(日吉メディアセンター)

6年生を送る会の準備や入学式で新1年生を前に歌う「ドキドキドン1年生」の歌唱練習が始まり、娘がもうすぐ2年生になる2020年2月末、突然の一斉休校宣言。娘が通う小学校も休校になることが知らされた。当の本人はのんびり屋、小さいことは気にしない性格。母である私が脳細胞をフル活動させて、学童は？お弁当どうしよう！となっているのをよそに、「学校お休みだって。いつまでか、先生もわからないって。」と、少しくしゃくしゃになったプリントをランドセルから出してきたのだった。

大変ありがたいことに、親が就労している低学年児童を対象とした「緊急受入れ」の登校が許可され、娘はお弁当と水筒、自習用のドリル類を持参して登校することとなった。とは言え、常にマスク着用、捕まえたらタッチする鬼ごっこは禁止、私語は慎み、お弁当は黙って前を向いて食べましょう、など新たなルールが増えた。学校にいる5時間授業の間はずっと自習。6歳の子どもにはなかなかの苦行であったろう。しかし「2年生になってもお友だちね」と書かれた折り紙のお手紙交換をしてくるなど、非常事態を彼女らしくこなし、なんだかほんやりとしたまま1年生生活が終わってしまった。もちろん6年生を送る会も、入学式への参加も中止。「せっかく校歌練習したのに。6年生ありがとうのお手紙も書いたのにな。」とほそっと言った娘になんと声をかけたらよいかわからなかった。

そうこうしているうちに私も夫も在宅勤務が始まり、4月下旬には息子が通う保育園から、登園自粛のお願いが出された。自我の芽生え真っ盛りな元気の塊を預けられない…絶望である。小学校や保育園に毎日元気に通えることがどれだけありがたいかを痛感し、先生方への感謝の気持ちが一層強くなった。行楽日和なのに在宅勤務＆休校＆登園自粛期間の5月の毎日、ロングバケーションと勘違いしがちな娘が生活リズムを崩さないよう、朝7時過ぎに文字通りたたき起こすことから始まっていた。午前中は習っていない2年生の内容を含んだ国語や

算数の宿題、本人は苦手な食べられないミニトマトの観察（食べて感想を言うのは私）に、夕方に縄跳び（お手本は私。筋肉痛との闘い）。読書記録の宿題があるのに公共図書館が休館していたことも痛手だったが、無料オンライン講座を視聴させるなどして母娘喧嘩を回避し、習い事や週1回1時間の校庭開放の時間に娘が息抜きできたのはよかった。一方、なぜ保育園に行ってはいけないかわからない息子は、仕事や勉強で忙しいような家族になかなかまっもらえず、しょっちゅう泣いていた。そして私は毎日何で体力を消耗させるか、何を食べさせるかばかりを考えていた。（バランスのとれたおいしい給食がないって辛い。）

そんな混沌とした毎日の中で、主に息子がお昼寝をしているとき、おやつを食べている間などに、2020年5月の私は集中して仕事ができる時間を絞り出していた。「おかあさん、ここわからない！」（宿題をしている娘）とか「電車、出して」（おもちゃのレールを部屋中に敷き詰めた息子）と言うのをなだめながら私は、電子ブックで利用できる教科書がどれだけあるか、電子ジャーナルに学外からきちんとアクセスできるかなどを調査し、せっせと電子ブックをアクティベートしていた。スマートフォンで。会社から貸与された立派なパソコンと大きなディスプレイをダイニングテーブルに置き「これからZoomで会議だから静かにね。」と言ったきり耳にイヤホンをして本格的な在宅勤務中である夫を横目に。

あれから1年。相変わらず小学校生活には制約も多いが、娘は「コロナだから仕方ないじゃん」と受け止めている。3歳になった息子の辞書には「ざいたく」が加わった。先が見えない状況の中、変化する必要がある部分を見極め、変わらずにいい自分を保つことの大切さを学ぶ機会が多かった2020年のことを、子どもたちが大人になったときに覚えているか聞きたい。そしてお酒でも飲みながら「あの時は大変だったよね」と話したい。